

# 宮前町浴場存続に向けての提案

2025年2月12日

宮前町内会・宮前町浴場利用組合・一般社団法人清水沢プロジェクト  
文責・佐藤真奈美（清水沢プロジェクト）

市営宮前町浴場は1971（昭和46）年に北炭が炭鉱住宅街の地区共同浴場として設置し、各住居に浴室が設置されていない鉱員住宅の暮らしを支えてきた存在でした。市営浴場となっても地域のコミュニティを支え、近年の住宅集約事業により住民の保健衛生の場としての役割をほぼ終えつつある状況でも、風呂付きの住宅から通い続ける人が多くいます。まちの姿は変わっても、地域活力の高い宮前町のコミュニティ維持に貢献している「生きている炭鉱遺産」と言えます。

このたび、夕張市から宮前町浴場を2025年8月末をもって閉鎖の方向で検討する方針が示されました。これは地下埋設タンクには使用期限があり、それを超えて使用するには改修が必要となること、また現状でもボイラーや配管などに不具合を多数抱えており、これらをすべて改修して使用を続ける多額の費用が必要となることが大きな理由です。夕張市はこれを見越して2015年から風呂なしの市営住宅居住者の移転を進めており、浴場は公衆衛生維持の場としての役割をほぼ終えていることから、この度の判断となったようです。

夕張市が赤字を抱えながらもギリギリの時期まで公衆浴場として浴場の運営を維持してきたことに対しては、とても寛大な措置であったと感じます。しかし、いざ浴場がなくなると考えると、雇用や地域コミュニティにとって計り知れない大打撃であり、おそらく宮前町は今後、これまでのような活力を維持できなくなることが考えられます。

また、炭鉱時代から現在まで同じ機能で稼働し続けている唯一の施設であるという価値があります。夕張の人情の温かさを育んできた炭鉱の共同浴場は「夕張そのもの」のシンボルであり、どんな遺構や展示施設にもかなわない文化財的価値があります。

この問題は「打つ手なし」の状況ではありません。今こそ皆の力で、夕張が夕張である最後の砦を残すために強く求めていきたいと考えていますので、ご協力をお願いいたします。

## 宮前町浴場の歴史

1971（昭和46）年建築 北炭清水沢炭鉱の地区共同浴場として使用される。

1980（昭和55）年、清水沢炭鉱閉山に伴い、夕張新炭鉱の浴場となる。

1982（昭和57）年新鉱閉山後、北炭連合浴場組合の浴場となる。

1985（昭和60）年10月、2か所目の市営浴場となる。石炭ボイラーから重油ボイラーへ変更。

1998（平成10）年、券売機導入に伴い、北星美装産業での入浴券売さばき所扱いを廃止。  
2019（令和元）年10月、住宅集約事業の完了に伴い、週3日営業に変更。

夕張市内で営業している唯一の炭鉱共同浴場であり、外観が当時の面影を残すまま営業している点では、空知旧産炭地域各地をみても非常に貴重な存在である（他市町の状況については調査を行う）。

- ・ 建築当初の平面図は残っていないようだが、現在の管理用の図面を入手したい。

## 宮前町浴場の現状

- ・ 浴場を利用する風呂なし市営住宅居住世帯は4世帯
- ・ 清水沢コミュニティゲート（旧宮コ23）の滞在者が利用
- ・ 利用者数は一日平均30数名。4世帯のほか、宮コから泉・憩など風呂付き住宅に転居した旧住民、清栄町清よ・新よ居住者、他地区の風呂なし住宅居住者、市内外の一般入浴者。
- ・ 他の浴場より観光目的で訪れる入浴者が多い
- ・ 清水沢プロジェクト関係の視察で見学する際、入場料として入浴料を徴収している
- ・ 2025年8月に使用期限を迎える重油の地下埋設タンクのほか、ボイラー、券売機等の老朽箇所の設備更新が必要（最低限1500万円、すべて改修すると2億円程度と示されている）

## 存続のための提案

浴場存続が必要な理由は極めて公共性の高いものであることから、あくまで公営による運営を前提とする。

### コンセプト

- ・ **財政再生団体脱却後に残すことができる唯一無二の「生きている炭鉱遺産」**
  - 炭鉱遺産と呼べるものの中で、用途を変更せずに現在も使われ続けている遺産は浴場と住宅のみ。そのうち市民の受益者が多く、かつ市外からの利用を見込んで「稼げる市有財産」となりうるのは浴場のみである。
  - 廃止一辺倒で将来にわたる歴史文化的地域資源を何も残せなかった財政再生期間を終えるにあたり、炭鉱由来の歴史・文化の象徴である浴場を、新たな価値を付与して存続させることは、財政再生団体脱却後の地域像の象徴となり得る。

→文化財指定による価値の明確化

国の登録有形文化財、日本遺産炭鉄港ほか、文化財指定や認定を目指すことで、存続のための意味付けを行う。また補修工事に補助を利用できるもので

あれば、財政負担を軽減することができる。  
女湯や番台を当時の状態に戻すことも検討する。

- **地域の歴史と文化を継承し、創造する場**

- コミュニティの維持からコミュニケーションの創造の場へ

浴場は宮前町が住宅整理による地域解体を経てもなお、地域コミュニティを維持させてきた最大の功労者である。風呂なし世帯や浴場に愛着のある世代がいなくなったとしても、コミュニティの維持のための最後の砦である。

市民の保健衛生の場としての役割を終えても、生きている文化財としての存在意義、価値が十分にある。地域内のコミュニティ維持の場から、今後は浴場への入浴を目標にやってきた地域外の人々が地域と交流し、あらたなまちづくりの担い手、関係人口を創造する場となる。

→浴場が存続し不利益を被る市民はいないことから、炭鉱遺産（文化財）を活用した交流の場への転換を行うべき

## 資金調達方法

### ①ガバメントクラウドファンディング（ふるさと納税利用型）

歴史・文化的価値の高さから、市内外からの関心が集まると思われる

（例）高校魅力化目標金額700万円→2千万円超

### ②文化財指定による補修補助事業

## 収益向上の為に

- 収益確保に適切な入浴料金の設定（一般的な施設並みの入浴料と市民割引設定）
- 交流資源としてのPR
- 入浴料以外の収入確保（タオル、せっけん、飲料、グッズ類などの販売）
- （例）現在1日30名×490円×13日×12ヶ月=年間230万円→現在の人数に加えて地域外30名×800円×13日×12ヶ月=370万円 合計600万円 営業日や料金設定などで相応の収益確保は可能
- 現状すぐにでも、土日どちらかを営業日とすることや、3浴場の休業日を調整し、いずれかの浴場が必ず開いている状態にすることも、利用者（市内外問わず）の利便性向上のために必要である。

-

## 総合戦略「清水沢エコミュージアムプロジェクト」との関係（改稿）

平成28年に夕張市が策定した夕張市地方人口ビジョン及び地方版総合戦略において、「産業遺産ツーリズム拠点としての清水沢プロジェクト」が掲げられ、そのメニューの中で旧宮コ23棟を改修した。そして「清水沢エコミュージアムプロジェクトに係る連携協定」を締結、活動拠点として旧清水沢プロジェクトに無償貸与を行った。令和2年からの第2期総合戦略では「産業遺産ツーリズム拠点としての『石炭博物館』『清水沢エコミュージアムプロジェクト』」と名称が変更となったが、現在まで実施中である。

市は初年度に巨額な投資を行い、それ以降も浄化槽使用料の免除措置を行っている。また当法人が毎年実施しているズリ山整備には、職員有志の参加もあり、大変心強い。しかし協定に基づき連携してエコミュージアムプロジェクトに取り組んでいるとは言い難いほど市の関与は薄く、協議の場を持つこともなく、すべて民間の動きに任せている状態が続いていた。

（※なお予算についても石炭博物館に関するもの以外はゼロが続いている）

清水沢エコミュージアムプロジェクト連携協定では「産業遺産の保存・活用・普及啓発」や「第2期地方版総合戦略に掲げる新たな人の流れ・関係人口・交流人口の創出」に関して、双方が連携・協力することとされている。炭鉱住宅と共同浴場は明らかに核となる産業遺産であり、地域住民と関係人口の接点になる。総合戦略の実現は予算の確保が前提とされており、平常時は各主体の努力に委ねられることは理解できる。しかし、緊急時の予算確保の根拠となるのが総合戦略なのではないだろうか。夕張の歴史文化は博物館の中だけで守られるものなのか？今こそ、優先順位を上げて計画を遂行してほしいと願うばかりである。

また、「市内各所の産業遺産群を結ぶ『産業遺産ツーリズム』の構築を図る」と謳っている以上、まず現時点で残存している地域資源・炭鉱遺産を現在の判断で失わせないことが必要である。

今後、財政再生団体脱却後に向けて、市内の地域資源を掘り起こし、活用を行い、徐々に収益力を上げていく必要がある。浴場については現時点では静かな地域の生活を守ることを優先し、単発のイベントを年1～2回開催しているのみで、大々的に入浴者数を増やす取り組みは行っていない。今後は、これまで通りの地域住民への配慮を行いながらも、交流の扉を開き、収益を上げていく必要がある。大きく稼ぐ・儲けることはできないのは石炭博物館等他の文化施設と大差ないだろうが、位置づけが変わることで収益性は確実に向上する。

総合戦略で石炭博物館と併記されている清水沢エコミュージアムは、地域全体を博物館と捉えてまちづくりを行う考え方であり、両輪をなしてこそ意義がある。形骸的な取り組みに終わらせるのではなく、計画を前進させる最大の契機が今であると捉えていただきたい。

＜参考 第1期総合戦略＞戦略2-3 産業遺産ツーリズム拠点としての「清水沢プロジェクト」

市内には、石炭博物館だけでは十分に伝えきることができない炭鉱遺産が数多く残されており、中でも清水沢地区には旧火力発電所、ズリ山、旧鉄路、旧炭鉱住宅などが集中している。こうした遺産を活かし、「清水沢プロジェクト」は、かつての炭鉱の記憶、夕張らしさを実体験できる交流の場づくりをコンセプトとして活動しており、同プロジェクトの活動は石炭博物館が持つ学習機能を補完する機能も持っている。

そこで、同プロジェクトが活用している旧炭鉱住宅を改修し宿泊体験施設として整備することで、宿泊を通じて夕張の生活文化を体験できる場としてだけでなく、清水沢地区に限らず石炭博物館や幸福の黄色いハンカチ広場など市内各所の産業遺産群を結ぶ「産業遺産ツーリズム」の拠点として構築を図り、多様な人材の交流を生み出す。

＜参考 第2期総合戦略＞戦略2-3 産業遺産ツーリズム拠点としての「石炭博物館」「清水沢エコミュージアムプロジェクト」

かつて本市を支えた石炭の歴史を後世に伝える石炭博物館についてはその中核的役割を担うとともに「炭鉄港」が日本遺産に登録されたことを踏まえ、その拠点の一つとして位置づける。

しかし、平成31年4月に発生した石炭博物館坑道火災による影響は非常に大きく、今後、拠点施設のあり方について早急に検討を行う。

また、炭鉱遺産が数多く残っている清水沢地区において、かつての炭鉱の記憶、夕張らしさを実体験できる交流の場づくりをコンセプトに活動している一般社団法人「清水沢プロジェクト」と連携し、同法人を拠点として、市内各所の産業遺産群を結ぶ「産業遺産ツーリズム」の構築を図り、多様な人材の交流を促進する。